

平成19年度  
第2回企画展



# 道具と人



開催期間 7月14日～10月21日

期間中の休館日 7月 17.23.30日 8月 6.13.20.27日  
9月 3.10.18.25日 10月 1.9.15.22日



宮代町郷土資料館

宮代町西原 289 TEL 0480-34-882

<http://www2.town.miyashiro.saitama.jp/>

## ごあいさつ

現在、私たちは様々な道具に囲まれて日々生活しています。はし、茶わんから始まり、テレビ、家具、コンピューターなど家の中でも数え切れないほどの道具があります。こうした道具は、500万年前、600万年前とも言われる私たちの祖先が使い始め、時代によって様々な工夫し、また、素材や環境に応じて変化させてきたものです。これらの道具によって私たちの毎日の暮らしが成り立っています。

今回の展示は、こうした道具と人との関係を身体のいろいろな部分とその働きから見てみようということで企画しました。

現代社会は、様々な道具がたくさんありますが、そうした道具の持つ本来の成り立ちや意味について、考える機会となれば幸いです。

この企画展の実施にあたり、多くの皆様にご寄贈、ご寄託いただきました資料を活用させていただきました。心より御礼を申し上げ、あいさつといたします。

宮代町教育委員会  
教育長 桐川弘子

## 道具のはじまり

人間が道具を初めて手にしたのは、500 万年前とも 600 万年前とも言われています。その頃の人類は、脳の容量も小さく現在のわたしたちの姿とはだいぶ異なっていたようです。

町内で最も古い道具は、今からおよそ 2 万年前、旧石器時代の槍の先に取り付けた「ナイフ形石器」やと、ものを削る「スクレイパー」呼ばれるもので、黒曜石で作られたものです。このほか約 1 万 3 千年前に作られ、同じ槍の先につけた「尖頭器」などが発掘されています。最後の氷河期の時代でした。

## 身をつつむ



人間は、いつしか衣服を身にまとい、また洞窟や家などに住み、直接的な自然の寒暖から身を守るようになりました。

このような直接体に身に付ける衣服、家、そして数々の冷暖房具は、身体を保護する皮膚の代わりの道具とも言えるのではないのでしょうか。それらが、それぞれの時代の中で様々に変化し全身をつつみ、さらに間接的に身体を保護するための道具も作られてきました。

家に住み、衣服で寒暖を調節し、「火鉢」や「湯たんぽ」、「コタツ」などで直接・間接的に体を温め、「うちわ」などで涼しくします。また、身を飾る道具も大昔から作られつづけてきました。

こうして、人々は自然から身を守るとともに、少しでも快適な生活が出来るようにと、いろいろな道具を作ってきました。

## 手と道具



道具を使う上で手は最も基本的なものです。人間が最初に道具を用いたのはまさに「道具を手にした」その手です。

手には、「つかむ」、「保つ」、「形作る」などの基本的な機能があります。人間が道具を用いられるようになったのは、まさに「手」のお陰であると言えるのではないのでしょうか。

つかむ道具としては、「はし」、「ペンチ」、「やっこ」、「くぎぬき」などがあります。保つ道具としては、古くは縄文土器に始まり、「かめ」、「はち」、「わん」や、広くは衣服のポケットなども入るでしょう。「形作る」道具としては、「ナイフ」、「のこぎり」などの道具が挙げられます。

手には、さらに支える、握る、もむなど様々な機能があり、その代用としての道具がたくさんあります。また、そうした道具を作るための道具、機械も多種多様な

ものが幅広く作られています。

## 足と道具



人間は二本足で立って歩きますが、このことが他の動物と大きく異なるところでもあります。

足は、「歩く」「走る」といった、人間が他のところへ移動するための機能を持ったものです。

こうした機能から、「ゲタ」「ぞうり」など身につけるものや、「自転車」「オートバイ」「自動車」そして空を飛ぶ「飛行機」など、直接歩くことなく移動ができる道具が生み出されました。

また、足を直接使って踏む作業をする代わりにの道具として、「麦ころがし」などもあります。

人間が歩き出してから、今日まで様々な道具が生み出され、現代では直接歩く機会も少なくなりました。

## 見る・聞く道具

物を見るのは、目の役割です。目で見たものが脳に伝わり、それが何であるか認識します。それを補助するものとして、暗くても見えるようにと「あんどん」や「ランプ」があります。また、見たものを記録にとどめる「カメラ」などもあります。

また、聞くという事は耳の役割で、音や声を知ることです。「電話」を使うことにより、遠くの人の声を聞くことができます。

そして、見ることと聞くことを合わせて、「見聞」と言いますが、見る・聞く両方の機能を持ったものに「テレビ」「パソコン」などがあります。

見る・聞くといった道具の発達によって、世界が非常に身近に、そして広くなってきました。

## 考える道具



「人間は考える<sup>あし</sup>葦である」との有名な言葉がありますが、人の脳の発達<sup>あし</sup>は道具の発達と無縁ではありません。むしろ、道具を手にし、さらにそれを工夫し考えることで、脳も大きな変化をとげました。より一層、人間自身を変化せしめたと言えるでしょう。

広く考えることにかかわる機能としては「思考」、「想像」、「記憶」等々様々なものがあり、人間の体を調整し、体自身を動かしています。

こうした考えることに関係する道具は、「そろばん」、「辞書」、「計算機」、「ワープロ」、そして現在では「コンピューター」が大きな役割を果たしています。この他、多くの道具が直接的あるいは間接的に「考える道具」としてかかわっています。

## あとがき

今、人々の暮らしの中には多種多様な道具があります。こうした道具は、より使いやすく、機能的にとその素材とあいまって、数百万年という途方も無い長い間に様々な形に変化してきました。

それらの道具の初源をたどると、自然とのかかわりあいの中で創られてきたことが分かります。人間は自然の所産であり、もともと自然に対して直接、例えば、手を使い叩いたり、切ったりするところを、道具を用いて行う、というところから出発しています。こうした、道具は、人間自身の持っている様々な機能が体外化されたものであるといえるでしょう。すなわち、「道具は人間自身」であるといえるのではないのでしょうか。そして、「道具を大切にする」、「物を大切にする」ということは、「人間自身」を大切にすることであり、しては「自然」を大切にすることにほかならないのではないのでしょうか。

本日は、平成19年度 第2回企画展「道具と人」に、ご来館いただき有り難うございました。

#### 協力者

#### ※ 50音順 敬称略

新井尚、伊草進、大塚満治、小河原悦子、折原静佑、折原一、金子和生、小島修、小島雅郎、小島明良、島村剛、関永節子、関根勸、関根文雄、関根はな、田口寛、中村多計志、中村忠男、並木勇、成田総一、野口丈吉、萩原一丸、深井義治、森山しず江、吉岡郁子、渡辺恵司、渡辺重義